

# プレイワークの考え方を取り入れた体育授業の効果に関する実証的研究

～小学3年生跳び箱「開脚跳び」を題材にして～

島田 雄紀 ( 東京学芸大学 )

## 1. 目的

本研究は、子どもの興味関心や意欲を活かすプレイワークの概念に基づいた体育授業が効果的であるのか、特に運動や体育に対してネガティブな感情をもつ児童により影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

- 1) 対象者：神奈川県内の公立小学校第3学年に在籍する児童59名とした。
- 2) 調査方法：跳び箱運動（開脚跳び）を題材とし、プレイワークの概念を利用した5時間の単元計画を作成し、筆者と学級担任の2名で授業を行った。実践前後に跳び箱運動に対する意識についてのアンケート調査を、毎時間後にワークシート記入や個別聞き取りも併せて実施し、実践を通じた児童の心情の変化を調べた。また跳躍動作の変容を見取るために跳び箱側方よりビデオカメラで撮影した。
- 3) 分析方法：授業前後での『こわい』『できない』『きらい』の心情に関して、 $\chi^2$ 検定（有意水準5%）を用いて全体の変容を分析するとともに、必要に応じて個別の聞き取り結果を利用した心情考察や個別支援の効果の検討も行った。

## 3. 結果と考察

- 1) 『こわい』の回答が12から3に減り、『こわい』という印象を払拭するのに有効であった（図1）。跳び箱運動に対する恐怖心が踏み切り局面に起因することに鑑み、終末局面から練習し助走を行わせない構成としたことが効果的であったと考えられる。
- 2) 『できない』の回答が19から2に減り、

『できない』印象の払拭にも効果的であった。容易かつ動きの感覚をつかめる課題設定が毎回なされていたためだと考えられる。

- 3) 『きらい』の回答が11から4に減り、『きらい』という印象の払拭にも効果的であった。結果的に被験者全員が跳び箱を跳び越すことができたという成功体験が背景にあるためだと考えられる。
- 4) 単元構想全体と同様に、支援を要する児童らに対する授業内での声掛けや個別指導についても、プレイワークの発想による手立てが効果的であった。大人目線の指導ではなく、あくまでも児童の思いを大切にすることにより主体的な学びに繋がったと考えられる。

	こわい	こわくない	合計
事前	12	43	55
事後	3	51	54
合計	15	94	109

$\chi^2$ 検定の結果  $p=0.047 (<0.05)$  となり、有意差が見られた。

図1 アンケートにおける『こわい』の回答数

## 4. 結論

プレイワークに基づいた小学校体育授業は、児童の主体性を引き出し、運動や体育に対するポジティブな印象をもつことに繋がることが分かった。

## 5. 主な参考文献

- 1) 板谷厚ら，跳び箱運動に恐怖心を持つ大学生における助走の練習が跳び箱の助走と跳躍に及ぼす影響，北海道教育大学紀要教育科学編，68巻（2号）：603-609，2018.
- 2) ヒヤダイン，体育科教育2019年3月号，大修館書店，2019.